

第 92 回日本小児科学会茨城地方会

会長 須磨崎 亮 (筑波大学臨床医学系小児科)

期日 平成 21 年 6 月 21 日 (日)

会場 つくば国際会議場 (エポカルつくば)

1. 咳嗽・喘鳴・嘔吐で発見し、バルーン拡張術で改善した食道狭窄の 2 か月男子例

総合病院土浦協同病院 小児科¹⁾、同 小児外科²⁾

馬場 信平¹⁾、朝貝 省史¹⁾、黒澤 信行¹⁾、渡辺 章充¹⁾、渡部 誠一¹⁾、堀 哲夫²⁾

咳嗽・喘鳴・嘔吐・体重増加不良にて入院。喘鳴・嘔吐が改善せず、GERD 等の鑑別のため上部消化管造影を施行し、下部食道高度狭窄 (1mm) と狭窄前拡張を認め先天性食道狭窄と診断した。透視下で栄養チューブ・ガイドワイヤー挿入困難なため、全身麻酔食道内視鏡下に狭窄部にガイドワイヤーを通しバルーン拡張術施行した。狭窄部を 15mm まで拡張し、以後ネラトンカテーテルにて定期的ブジーを継続して嘔吐・喘鳴消失、体重増加を得て 7 週間で退院した。

2. *H. pylori* 感染を伴った穿孔性十二指腸潰瘍の男子

常陸大宮済生会病院小児科¹⁾、同外科²⁾

熊谷秀規¹⁾、松本静子¹⁾、江橋正浩¹⁾、目黒由行²⁾、関根良介²⁾、横山 卓²⁾、小島正幸²⁾

【症例】13 歳の男子。母親が *H. pylori* 胃潰瘍。1 時間前からの心窩部痛のため来院した。腹部に筋性防御があり、CT で腹腔内遊離ガス所見を認めた。腹腔鏡下に球部の穿孔を確認、大網で充填した。その後の内視鏡検査で *H. pylori* 感染を確認、除菌治療を行った。2 ヶ月後の尿素呼気試験で除菌成功を確認した。【考察】本邦の *H. pylori* 感染関連小児穿孔性十二指腸潰瘍の報告は、7 例すべてが 10 歳代男子でありハイリスクといえる。

3. MA-1 栄養中に難治性湿疹を呈したビオチン欠乏症の 1 例

茨城県立こども病院 小児科¹⁾、同 新生児科²⁾、島根大学医学部小児科³⁾

黒田 わか¹⁾、柳瀬 健太郎¹⁾、新井 順一²⁾、宮本 泰行²⁾、虫本 雄一³⁾、土田 昌宏¹⁾

在胎 37 週 1 日 2140 g。日齢 11 に下痢・チアノーゼが出現したため当院 NICU に入院となり、ミルクアレルギーと診断された。MA-1 で栄養中、体重増加不良あり。生後 6 か月ごろから眼・口唇・肛門周囲に境界明瞭なステロイド抵抗性の湿疹が出現。尿中有機酸分析、アシルカルニチン分析の結果よりビオチン欠乏症と診断した。乳児用調整粉乳中のビオチン量をもとに考察する。

4. 血友病児の生活支援における診療連携の役割と課題

筑波大学医学群医学類学生¹⁾、同臨床医学系小児科²⁾、茨城西南医療センター病院小児科³⁾、県西総合病院 小児科⁴⁾

後藤 悠大¹⁾、五味 詩絵奈¹⁾、桑原 沙絵子¹⁾、福島 敬²⁾、中尾 朋平²⁾、中嶋 玲子²⁾、高橋 実穂²⁾、工藤 豊一郎²⁾、長谷川 誠³⁾、中原 智子⁴⁾、須磨崎 亮²⁾

血液凝固因子の補充療法を日常的に実施するにあたり、自宅や学校に近い医療機関の協力を得ることは大きなメリットであると考えられる。診療連携が実現している8症例について、養育者および各医療機関の双方を対象に調査を実施した。今後の継続とネットワーク拡大のためには、血友病およびその治療などに関する専門的情報が重要であることが明らかになった。

5. 血球貪食症候群を合併したSLEの1例

筑波メディカルセンター病院 小児科¹⁾、筑波大学附属病院 小児科²⁾

今井 博則¹⁾、林 大輔¹⁾、野末 裕紀¹⁾、齋藤 久子¹⁾、青木 健¹⁾、市川 邦男¹⁾、須磨崎 亮²⁾

10歳の女兒。1年前に筑波大学附属病院でSLEと診断。内臓病変の合併がなく、ステロイド導入は可能な限り見合わせていた。2009年2月、発熱、リンパ節腫脹、腹痛、経口摂取不良のため当院に紹介された。入院後、WBC 1600/mm³、Hb 10.8g/dl、PLT 6.9万/ μ lと汎血球減少が見られ、フェリチンが2220ng/dlと上昇し、骨髓検査は行わなかったが血球貪食症候群の合併が疑われた。ステロイドを開始したところ速やかに改善した。

6. 中枢性尿崩症治療中に診断された視床下部腫瘍の1例

日立製作所水戸総合病院 小児科¹⁾、筑波大学附属病院 脳神経外科²⁾

小磯 隆雄¹⁾、安堂 真実¹⁾、吉田 尊雅¹⁾、小宅 奈津子¹⁾、森山 伸子¹⁾、永井 庸次¹⁾、阿久津 博義²⁾、山本 哲哉²⁾

症例は14歳男児。12歳時に多飲・多尿を主訴に受診、水制限試験、AVP負荷試験にて中枢性尿崩症と診断した。診断時の頭部MRIではT1強調矢状断における後葉の高信号の消失が確認され特発性と考えられたが、1年後に下垂体茎の腫大が出現した。約半年後視床下部に腫瘤形成とHCGの上昇が確認され胚芽腫が疑われた。中枢性尿崩症にみられる頭部MRI所見について、文献的考察を加え報告する。

7. フィラデルフィア染色体陽性急性リンパ性白血病(Ph+ALL)に対する同種骨髄移植施行6年後に血性心嚢水貯留をきたした1例

茨城県立こども病院 小児科¹⁾、同 心臓血管外科²⁾、筑波大学附属病院 小児科³⁾、同 臨床検査科⁴⁾

穂坂 翔¹⁾、小林 千恵¹⁾、加藤 啓輔¹⁾、小池 和俊¹⁾、土田 昌宏¹⁾、菊地 斎¹⁾、村

上 卓¹⁾、塩野 淳子¹⁾、坂 有希子²⁾、野間 美緒²⁾、五味 聖吾²⁾、
阿部 正一²⁾、中尾 朋平³⁾、中嶋 玲子³⁾、福島 敬³⁾、南木 融⁴⁾

21歳女性。14歳初発のPh+ALL。診断から7か月後に同種骨髄移植施行。慢性GVHDに対してタクロリムス、プレドニンを内服中。2009年4月安静時胸痛が出現、エコー上心嚢水貯留を認め、心嚢ドレナージで240mlの血性心嚢水を認めた。心嚢液、骨髄中のminor BCR-ABL(PCR法)は陰性、細菌・真菌・ウイルス分離陰性。慢性GVHDに伴うと思われる遅発性、血性心嚢水貯留を経験したので文献的考察を加え報告する。

8. 持続する蛋白尿を契機に診断されたチアノーゼ性腎症の1男児例

筑波大学附属病院 小児科¹⁾、同 循環器外科²⁾、同 腎泌尿器内科³⁾、
茨城農芸学院⁴⁾

岩淵 敦¹⁾、中村 みちる¹⁾⁴⁾、篠原 宏行¹⁾、堀米 仁志¹⁾、平松 祐司²⁾、
臼井 丈一³⁾、鴨田 知博¹⁾

15歳男児。単心室に対して6歳時にFontan術施行。13歳時に学校検尿で軽度蛋白尿を指摘され、ACE-I, ARBの内服が開始された。15歳から尿蛋白が増加し、腎生検を施行したところ、肥大糸球体や巣状分節性糸球体硬化が認められ、チアノーゼ性腎症と診断された。本症は無症候性蛋白尿、腎機能低下などが認められ、先天性チアノーゼ性心疾患の合併症の一つとして念頭に置くべきである。

9. RSウイルス感染を契機に初めて心室中隔欠損と診断された2乳児例

茨城県立こども病院 小児科¹⁾、同 心臓血管外科²⁾、日立製作所水戸総合病院 小児科³⁾、水戸済生会総合病院 小児科⁴⁾

村上 卓¹⁾、菊地 斉¹⁾、塩野 淳子¹⁾、土田 昌宏¹⁾、阿部 正一²⁾、
五味 聖吾²⁾、野間 美緒²⁾、坂 有希子²⁾、小宅 奈津子³⁾、内谷 哲⁴⁾

先天性心疾患を有する乳幼児はRSウイルス感染の重症化や、感染により外科治療が遅れる事がある。2008年12月にRSウイルス感染のため近医へ入院した乳児2例(3か月女児、4か月男児)がレントゲン所見等から心疾患が疑われ、当院を紹介された。2例とも肺高血圧を伴う心室中隔欠損と診断された。いずれも心雑音は小さく体重増加不良は軽度であった。感染の改善を待って心内修復術を施行された。

10. 先天性梅毒を疑った1か月男子例

総合病院土浦協同病院 小児科

朝貝 省史、黒澤 信行、渡辺 章充、渡部 誠一

出生時異常なく、IgM=14であったが、1か月健診時に全身性紅斑、肝脾腫、血小板減少を認め入院精査となった。慢性炎症、特徴的な皮疹、RPR=3.4倍、TPLA=800倍から先天性梅毒を疑ったが、FTS-ABS IgM陰性、母親の出産6週前のRPR・TPLAとも陰性のため、診断確定が困難であった。血小板減少が進行するため、ペニシリ

ンG 20万単位/日 10日間投与したところ、発疹消失、血小板正常化し、3週間で退院した。生後8カ月時に骨、眼、神経等の合併症を認めていない。

11. 水痘ワクチンの効果の検討 ～水戸市K幼稚園での流行を通して～

おひさまこどもクリニック

内田 章

水戸市のK幼稚園で2008年12月に水痘が流行し、85名中34名が罹患した。アンケート調査で水痘ワクチンの効果を検討した。ワクチン接種率 69%。過去から累積した罹患率は接種なし83%、接種あり52%で有意差あるも、接種を受けても半数は罹患していた。今回流行での罹患患者に対して、接種有無による症状の程度を比較すると、接種ありでは発熱は有意に軽く、発疹の水疱化は有意に少なく、発疹数は少ない傾向であった。

12. 平成20年度土浦市4小学校のインフルエンザ流行調査

霞ヶ浦医療センター小児科

山口 真也

土浦市小学校におけるインフルエンザ流行アンケート調査を20年度も行った。対象は過去二年間と同じ4小学校で、2551名(98.1%)から回答を得た。ワクチンを1回以上接種した児童は57.9%で、接種群は有意に年齢が低く、兄弟数が少なく、前年度のワクチン接種歴が多かった。今年度はA型とB型の流行を認め、574名が迅速検査で確定診断された。ワクチンの有効率は、多変量解析によりA型に対し40%(8-61%)、B型に対し、-38%(-95-5%)と算出された。

13. 極低出生体重児に発生した迅速な対応を要する合併症を伴う巨大血管腫二例の治療経験

総合病院土浦協同病院 新生児科¹⁾、同 眼科²⁾、同 皮膚科³⁾、同 小児外科⁴⁾、
現 神奈川県立こども医療センター 遺伝科⁵⁾

今村 公俊¹⁾、榎本 啓典¹⁾⁵⁾、齋藤 蓉子¹⁾、永吉 亮¹⁾、倉信 大¹⁾、齋藤 可奈¹⁾、
坂田 典繁²⁾、盛山 吉弘³⁾、堀 哲夫⁴⁾、朝田 五郎¹⁾、清水 純一¹⁾

1例目は1322gで出生した男児。日齢14頃から左頸部巨大血管腫が発生し、循環血液量の増加から心不全となり、9日間の人工呼吸管理を要した。2例目は968gで出生した女児。日齢30頃から発生した右上眼瞼巨大血管腫のため開瞼困難となった。いずれもステロイドによる血管腫そのものに対する治療のみならず、その合併症に迅速な対応が求められた。本症例の経過、治療について文献的考察を加え、報告する。

14. 偶然に発見された新生児同種免疫性血小板減少症の双胎例

筑波大学附属病院 小児科

田村 剛一郎、城戸 崇裕、今川 和生、日高 大介、西村 一記、中尾 厚、齋藤 誠、宮園 弥生、須磨崎 亮

新生児同種免疫性血小板減少症(Neonatal Alloimmune Thrombocytopenia; NAIT)は、児に発現している血小板抗原あるいはリンパ球抗原に対し母が抗体を産生して、児の血小板が破壊される疾患である。我々は出生時の血液検査によって偶然に血小板減少を発見された双胎児の症例を経験し、抗 HPA-3a 抗体と抗 HLA-B54 抗体による NAIT と診断した。NAIT は重篤な頭蓋内出血を起こすことも報告されている重要な疾患である。今回、その臨床的意義や診断過程、その管理について述べる。

15. 当施設における飛び込み分娩症例の検討

筑波大学附属病院 小児科¹⁾、同 産科婦人科²⁾

今川 和生¹⁾、城戸 崇裕¹⁾、田村 剛一郎¹⁾、日高 大介¹⁾、西村 一記¹⁾、中尾 厚¹⁾、齋藤 誠¹⁾、宮園 弥生¹⁾、須磨崎 亮¹⁾、小倉 剛²⁾、小島 真奈²⁾、濱田 洋実²⁾

近年、自宅分娩や飛び込み分娩が社会的話題となっている。妊娠経過中の母児管理がないため、母児双方にとってリスクが高いことに加え、医療側も安全に関するリスクや診療上の負担が大きくなるという点が指摘されている。我々は過去3年間の当施設における自宅分娩及び飛び込み分娩出生児31例について検討した。NICU6例、GCU2例、産科新生児室22例を収容し、他院に1例を新生児搬送した。死亡症例は2例あった。医学的社会的問題について述べる。

16. ポリメラーゼ連鎖反応法(PCR)にて髄液/血清よりヒトヘルペスウイルス(HHV)-6 型/7 型遺伝子の検出を試みた 10 例

取手協同病院 小児科

寺内 真理子、向井 純平、来住 修、前田 佳真、松原 洋平、鈴木 奈都子、太田 正康

当科において08年8月から09年4月の間に痙攣重積にて入院となり、髄液か血清あるいは両者のPCRを提出したものが10例あった。臨床診断は2例が突発性発疹に伴う急性脳症、1例が突発性発疹に伴う髄膜炎、4例が突発性発疹、1例が胃腸炎関連痙攣、2例は原因不明であった。4例から髄液よりHHV-6型/7型遺伝子が検出された。この4例を中心に症状・経過などについて文献的考察を交え報告する。

17. 広汎性発達障害児の感覚統合療法前後におけるストレスの変化

なめがた地域総合病院 小児科¹⁾、同 リハビリテーション部²⁾

鈴木 直光¹⁾、木鉛 聡恵²⁾

発達外来で広汎性発達障害と診断された後、何も投薬せずに感覚統合（SI）療法を開始し、その前後でどの程度ストレスが変化しているかを前方視的に検討した。対象は7例（男6例）で、平均7.4歳、平均IQ60。Drop out2例を除く5例は継続してSI療法を受けており、前庭覚、触覚、固有受容覚の改善とともにストレスの低下傾向が認められた。Drop outした2例はストレスが増加していた。療育とSI療法を行うことでストレスはさらに減少すると考える。

18. 急速に呼吸不全に進展した Guillain-Barre 症候群と Bickerstaff 脳幹脳炎との合併例

茨城県立こども病院 小児科¹⁾、筑波大学附属病院 小児科²⁾

後藤 昌英¹⁾、本山 景一¹⁾、泉 維昌¹⁾、小池 和俊¹⁾、土田 昌宏¹⁾、
田中 竜太²⁾

症例は9歳男児。受診10日前から感冒症状が出現し、前日に下肢筋力低下、傾眠傾向が出現した。入院当日、著明な高二酸化炭素血症をきたしており人工呼吸器管理を開始した。重症 Guillain-Barre 症候群と考えガンマグロブリン大量療法、ステロイドパルス療法、血漿交換療法を施行した。身体所見、電気生理学的検査、抗糖脂質抗体検査から Guillain-Barre 症候群と Bickerstaff 脳幹脳炎との合併例であると診断された。

19. 小児脳性麻痺に対するボツリヌス毒素治療法の有用性

茨城県立医療大学 小児科

岩崎 信明、中山 純子、絹笠 英世、新 健治、佐藤 秀郎

頸部の側方偏位を伴う痙性四肢麻痺小児7例に筋緊張寛和と生活機能改善を目的に頸部、肩甲体周囲、腰背部にA型ボツリヌス毒素治療をおこなった。GMFCS レベル I の痙性両麻痺1例にも歩行動作の改善を目的に下腿に施行した。体軸偏位の改善、有痛性筋痙縮の緩和などの効果が得られた。間接的には呼吸、栄養などの全身症状の改善にも有効性であった。本法は脳性麻痺の筋緊張コントロールのために簡便で有用な方法と考えられた。

20. 当院における虐待が疑われた症例の検討

筑波メディカルセンター病院 小児科

齊藤 久子、野末 裕紀、今井 博則、青木 健、市川 邦男

過去4年間に当院で虐待或いは介入の必要な不適切な養育状況と判断された34例について報告する。身体的（心中未遂3例を含む）17例、心理的（DV9例を含む）12

例、ネグレクト 5 例。転帰および対応は、死亡 1 例、保護 9 例、児童相談所での加害者への治療 1 例、市の指導や家庭訪問 11 例、多機関の介入 5 例、両親の離婚・祖父母宅での養育等環境調整 7 例。DV や心中未遂症例への対応は特に不十分になりやすく慎重な対応が必要と思われた。